

論 文

## 王国の自家中毒

— 谷崎潤一郎「小さな王国」論 —

高 橋 幸 平

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
准教授The Autointoxication of Sovereignty in Tanizaki Junichiro's  
“The Little Kingdom”

TAKAHASHI Kohei

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Associate professor

## はじめに

夢と現実との面白い境目にある少年は潤一郎にとって生彩ある詩材に違ひない。

佐藤春夫「潤一郎。人及び芸術」<sup>1</sup>

谷崎の描く子どもたちの世界は、私たちの日常にはない、残酷で鮮やかな色彩に満ちている。むせかえるほどに濃密な空気は、もう大人のものではない。ではそれは、幼い私たちが生きたはずの世界だろうか。たしかに私たちが生きたのは原色の世界だったかもしれない。しかしそれは原色と原色とがその境で混ざり合うような昨日と今日とが、夢と現実とが、あの人とこの人とがまだ溶け合ったままの、そんな世界ではなかったか。子どもの眼に映る、まだ十分に分節化されない世界に、谷崎は太く濃い輪郭を引いていく。それはリアリズムが追認した「現実」の硬く細い線ではない。幼い私たちにはそれとわからなかった、怖さ、汚さ、明るさ、淫らさ、美しさ、妖しさを、谷崎はその筆で縁取っていく。谷崎の「少年もの」は子どもの世界であって子どもだけの世界でない。

悪魔主義と呼ばれる時代のあと、自伝的作品を立て続けに発表した谷崎は、大正七年、小学校を舞台とする中篇「小さな王国」を発表した。<sup>2</sup>「少年もの」の一つである。

物語は、自らを老練と特む小学校教師と、その小学校へ転校してきた一人の生徒をめぐって展開する。師範学校を卒業したあと東京で教鞭を執っていた貝島昌吉は、十五年のあいだに次第に出世し、月俸四十五円の訓導にまで漕ぎつけた。ところが子が増えて出費が嵩むようになり、彼は都会の経済的圧迫から逃れて家族とG県M市へと移り住むことになる。当初、M市で安穏な生活を送っていた貝島であったが、その学級に一人の生徒・沼倉庄吉が転校してくることで、彼の順調な教員生活は徐々に歪んでいく。貝島には「子供で居て子供でないやうな、煙つたい人間のやうに」感じられる沼倉は、転校してまもなく同級生たちを敬服させ、配下のようにコントロールし始める。ある日の修身の時間、二宮尊徳の逸話を講じる貝島の目を盗んで私語を繰り返す沼倉を貝島が咎めると、全級の生徒が自ら犠牲になって彼をかばおうとする。沼倉の異様な威力を知って驚く貝島であったが、しかし彼は教師としてこの少年をうまく利用し、再び学級を治めようと考えている。この沼倉操縦策は一時き功を奏したように見え、またそれは貝島の自尊心を満足させもした。

一方、貝島家では妻が肺病にかかり、次第に困窮の度合いが増していく。ある日貝島は、自分の学級に属する息子の啓太郎が、買えるはずのない色鉛筆や餅菓子な

ど、さまざまなものを手にしていることを知る。啓太郎にその金の出所を問いただす貝島だったが、啓太郎は容易に話さない。ようやく真相を語り始めた啓太郎であったが、その話は貝島を驚嘆させるものであった。首尾よく学級の生徒たちを大人しくさせた沼倉は、貝島から激励と賞賛の辞を聞かされると、感奮すると同時に一層その力を発揮し、果てには自ら大統領となつて、生徒のあいだで沼倉共和国を作り上げていたのである。沼倉は各種の役員を任命したうえ法律や罰則をもうけ、さらには独自の紙幣まで発行して一つの経済システムを成立させていた。沼倉共和国では市場が開かれ、啓太郎はそこで種々の品を購入していたのである。

貝島家はますます困窮し、ついには家中に一銭もないところまで追い込まれる。神経衰弱に襲われる貝島は、ある日、沼倉共和国の市場に出くわす。正気を失いつつある貝島は「口もとではニヤニヤと笑つて居ながら、眼は気味悪く血走つて」、「先生は今日から、此処に居る沼倉さんの家来になるんだ。みんなと同じやうに沼倉さんの手下になつたんだ」と口走る。沼倉から紙幣を与えられた貝島は、洋酒屋でその紙幣を使いそうになる。その異常さに自らがつき、正気を取り戻したかのような貝島であったが、店員に対する「いづれ三十日になれば、此の書附と引き換えに現金で千圓支払ひますから。……」という言葉によって、彼が狂気に陥つたままであることが示唆されて物語は閉じられる。

宗像和重はかつて、この作品には『大人—子供』『教師—生徒』『本物—贋物』『善—悪』といった問題から、教育、国家、貨幣などを含む数多くの魅力的な視点がちりばめられて<sup>3</sup>いると指摘したが、その後の研究はまさに、これらそれぞれの観点において、テキストが放つ意味や批判性を読んできたと言える。本稿の着眼点もまた宗像が提示した「教師」「生徒」「教育」「国家」と関わる。作品の舞台とされる大正七年頃の時代背景を参照することで、テキストの細部が紡ぐ、国家と教育をめぐるドラマを読みみたいと思う。

本稿はまず、「小さな王国」というタイトルについての考察から、学級で権力の交代劇が起こったプロセスについて論じる。その際、第一に貝島がどのような教育者であるかを、第二に沼倉がどのような性質の持ち主であるかを、本文や同時代言説をもとに分析する。さらに、そこで明らかになる沼倉の性質が生み出された背景を、同時代の修身教育を参照しつつ解明し、最後にそれらの考察を踏まえて、国家と教育をめぐる同時代状況において本テキストが持つ意味について述べる。

## 「小さな王国」と「沼倉共和国」

「小さな王国」というタイトルは何を意味するのだろうか。一見、それは沼倉を中心とする子どもたちの共同体を指すようにも思われる。つとに川端康成が「子供たちが鷹貨幣の遊戯に耽るうち、次第にその心理に支配されて、『子供の王国』を築き、そこに一種の生活が生れるありさまを描き、もの凄いはかりであった」と評したのをはじめ、たとえば宮城達郎は「沼倉少年が建設した『小さな王国』は、教師の貝島を完全に敗北せしめた」と物語内容を説明し、前田愛は「沼倉の作り出した小さな王国」、「この小さな王国が、まさに反国家のユートピアになっている」と読んだ。いずれも明らかに、「小さな王国」を沼倉の作り上げた共同体として理解している。たしかにこの共同体はわずか十歳ほどの小さな子どもたちによって構成されており、したがって作者が「小さな王国」という言葉でこれを指示していたと考えても不自然ではない。

しかし、テキストの細部にはこの解釈では説明できない点が紛れている。すなわち、語り手は子どもたちの共同体を、「王国」ではなく一貫して注意深く「共和国」と呼んでいるのである。宗像は「作中で樹立されるのが『沼倉共和国』である<sup>4</sup>」にもかかわらず、題名が『小さな王国』であったことを指摘しながらも、それは谷崎の混同であり、どちらの言葉も生徒たちの共同体を指すものだと考えている。そしてそのような基礎的な概念の混同が見られる以上、「高橋注、共產主義に関して」それほど切実な社会批判が企てられているとは思われない<sup>5</sup>と結論づけている。作者は本場に「王国」と「共和国」との違いに無自覚だったのだろうか。テキストは沼倉を頂点とするこの共同体をたびたび「沼倉共和国」と呼ぶが、決して「王国」と呼ぶことはない。また作者がタイトルを改める機会がなかったわけでもない。やはり「小さな王国」は「沼倉共和国」とは別のものとして作者に意識されていたのではないか。言うまでもなく、「王国」と「共和国」とは大きく異なる国家体制である。タイトルとテキストにおいて、あたかもその差を強調するかのよう「王国」「共和国」といった表現が採られていることを軽視するわけにはいかない。

試みに近代の辞書を引くと、『言海』に「共和政治」の項が立ち、「政体ニ、世襲ノ帝王無ク、国民、互ニ人物ヲ選挙シテ、大統領トシ、代ル代ル国政ヲ統ベ行フモノ」とある。生徒の信望を集めた沼倉大統領が統べるこの共同体は、まさしく「共和国」と呼ぶにふさわしく、また同時に「王国」ではあり得ない。

一般に、「王国」では最高権力が世襲によって継承され、共同体の構成員は権力を選ぶことができない。近代以降の世界では、立憲君主制を採ったイギリス、革命

前のロシア、そして明治維新から大戦終結までの日本における君主制などがその典型として挙げられよう。

右の例のうち、ロシア革命は本作品にとって重要である。周知の通り、一九一七年一月、ボリシェビキが二月革命後の臨時政府を打倒し、レーニンを頂点とする世界で最初の社会主義国家、ソビエト社会主義ロシア共和国が成立した。本作品発表前年のことである。実際、この作品が同時代のロシア革命、あるいは共産主義思想と関係することは発表当時から指摘されてきた。よく知られるのは、本作の二ヶ月後に発表された吉野作造の評言である。

「中外」八月号に載せられた谷崎潤一郎氏の「小さな王国」は我国現代の社会問題に関し頗る暗示に富む作物である。小学生の単純な頭から割り出された共産主義的小生活組織の巧みに運用せらるゝ事や、前途有望を以て自らも許し人も許して居つた青年教育家の生活の圧迫に苦しめる結果、不知不識其共産的団体の中に入つて行く経過は、一点の無理がなくすらくと説き示されて居る。作者の覗ひ所は何れにせよ、我々は之によつて現代人が何となく共産主義的空想に耽つて一種の快感を覚ゆるの事実を看過する事は出来ない。而して少しく深く世相を透視する者にとつて今や社会主義と共産主義といふ事は、理論ではない、一個の厳然たる事実である。

このように吉野は「小さな王国」に「我国現代の社会問題」を見る。すなわち、沼倉の作る組織が「共産主義的」であることを指摘し、貝島がそこに引き込まれるのは経済的な「生活の圧迫」が原因であると解釈するのである。実際、教員である貝島の困窮ぶりは、単なる虚構の設定としてのみ理解するわけにはいかない。日高佳紀が指摘するように「大戦中からのインフレは人々の生活を圧迫することになるが、殊にこの時期の教師の貧窮ぶりはひどく、その煽りからくる師範学校進学者の減少が大きな社会問題になるほど」<sup>11</sup>だったのである。したがって吉野がこの文章で、「共産主義的空想」に快感を覚える心理を物語の一登場人物に還元せず「現代人」の問題へと一般化しているのは、当時それなりの切実さをもつて理解されたはずであった。この作品を「事件なり人物なりを周囲の世なり社会なりから全く切り離して書く」<sup>12</sup>と酷評する文芸時評などと比較してみれば、吉野がいかに正しく当代の社会問題という観点のもとに本作品を評価しようとしていたかがわかる。「作者の覗ひ所は何れにあるにせよ」<sup>13</sup>、このテキストはそのような社会思想的な解釈を呼び込む環境にあったのである。

さて、ロシア革命を、封建的・非民主的な政治形態である「王制」が「共和制」によつて打倒された事件と理解するならば、タイトルである「小さな王国」は沼倉

共和国ではなく、それによつて権力を奪われた貝島の王国だと読まなければならぬだろう。生徒は、互選によつて彼らの教師を選ぶことなどできない。教室の権力者である担任教師は、世襲ではないにせよ、いわば支配される生徒たちの関与できないプロセスで決定する。それはまさに、「王国」に見られる支配者と被支配者との関係と同じ構造だと言える。貝島の「小さな王国」としての学級は、共同体のメンバーによつて認められ選出された沼倉の「共和国」に取って代わられたのである。ではそのような権力の交代劇は、なぜ、どのように生じたのか。次に、貝島の「王国」支配のあり方に目を向けてみよう。

### 教師としての貝島

貝島はどのような人物であり、またどのような教育者であったか。

学者の夢を諦め小学校教員になった貝島は「律儀で小心で情に脆い」性格である。また彼は「性来子供が好きで」、「いろ／＼の性癖を持つた少年の一人々々に興味を覚えて、誰彼の区別なく、平等に親切に世話を焼くような人物であった。周囲からは篤実で老練な教師と評され、自らもそう信じる。彼にはとりわけ大事にする科目があった。修身である。彼は修身の時間に限っては特別に厳格であった。実際、その時間中に沼倉の私語を見とがめた貝島は、「体罰をも加へかねないかのやうに、両手で藤の鞭をグツと撓はせて見せた」のである。

とはいえ、通常貝島は「極く打ち解けた、慈愛に富んだ態度を示して、やさしい声で生徒に話しかける」ことを旨としている。そして沼倉が級中の信望を集めていることを知った時には、教員のあるべき姿を次のように考える。

『学校の先生』たちは大きななりをして居ながら、沼倉の事を考へると忸怩たらざるを得ないではないか。われ／＼の生徒に対する威信と慈愛とが、沼倉に及ばない所以のものは、つまりわれ／＼が子供のやうな無邪気な心になれないからなのだ。全く子供と同化して一緒になつて遊んでやらうと云ふ誠意がないからなのだ。

このように貝島は、生徒を威圧し矯正しようとする「恐い先生」ではなく、「面白いお友達」として気に入られる方が、彼らの信頼を集められることに思い至るのである。

「小さな王国」が発表された大正七年頃の教育界は、まさに「旧教育」から「新教育」への転換期にあつた。<sup>13</sup>自由主義運動を背景に、教育界には「新教育」と呼ばれる理論や実践が活発に導入されたのである。「新教育」の実践は多様だが、教師

を頂点とするそれまでの画一的で詰め込み式の教育に対する批判と、児童の関心を本位にした教育方針やカリキュラムの推奨という点は共通していた。

先に見た貝島の教育観と「新教育」との関係についてはすでに指摘がある。たとえば田中俊男は、「全級が一致してみんな立派な人間になるやうに、みんなお行儀がよくなるやうに導いて貰ひたい」と、沼倉に学級自治を任せようとする貝島の教育方針と、「新教育」旗手の一人であった西山哲治の思想との一致を指摘し、貝島が「児童中心主義」の隠れた実践者であったことを論じる。<sup>14</sup>一方、出木良輔は、そのような貝島の開明的な態度は彼の側面ではなかったことに注意を促す。貝島ははじめから児童中心主義者であったわけではなく、「恐い先生」から『面白いお友達』、すなわち明治期に支配的だったヘルバルト式の教育姿勢から大正期の『新教育』が掲げた『児童本位主義』へ、そして教育そのものを目的とする『教育者』から『生計の資』を目的とする『学校教師』へ<sup>15</sup>変化したというのである。これよりもはやく日高は、「恐い先生」よりも「面白いお友達」になるべきだという貝島の発想に、「教師をもちや『聖職』として特権的に位置づけることができなくなつた」同時代の状況を読んでいた。<sup>16</sup>出木はこの変化を「当時の学校教育のパラダイムシフトを反映したもの」だと読み、「児童本位主義」の本質とは（中略）教室における教師の立場の相対的な下降に他ならなかつた」と結論づける。貝島が沼倉に権力を奪われるのは、そのような「新教育」の帰結だとする出木は、このテキストを「新教育」への皮肉だと解釈するのである。<sup>17</sup>

なるほど、貝島の教育観はたしかに大正期の「新教育」と重なるだろう。だとすれば貝島の敗北を「新教育」敗北のアナロジーだと読むことも一つの見識だと言える。ただ、ここで見逃してはならないのは、このような権力の交代劇をもたらした原因が単に「新教育」を実践しようとした貝島の性質にだけあるのではないということである。それがドラマの重要な要素であることに間違いないが、しかし同時にこのような転覆が生じたのは、その中心となつた人物があつた沼倉だったからだということを忘れてはならない。実際、沼倉がやってくるまでの教室は、貝島によってコントロールされていたのである。したがって、権力の転覆の意味を真に捉えるためには、次に沼倉という少年のあり方を注意深く分析しなければならない。

## 沼倉の二面性

東京から転校してきた沼倉は、はじめ貝島には「きつと成績のよくない、風儀の悪い子供だらう」という印象を与えたが、実際には「むしろ無口なむつ、りとした

落ち着いた少年」であつた。しかし、そのうち彼の非凡さが明らかになつていく。腕力ではそれまでの餓鬼大将に劣るはずの沼倉は、「勇氣と、寛大と、義侠心」によつて級中の覇者となり、転校してきてからあつという間に他の生徒たちを支配する。沼倉の威力はそれにとどまらず、教員である貝島以上に周囲の子供たちから信望を集め、秘密裏に沼倉共和国を作るにまで至る。そこでは自らが大統領として絶対的な権力を握り、法律や貨幣制度まで整えてしまうのである。

転校生でありながら瞬く間に級中を支配し、果ては担任の貝島までをも飲み込んでいく沼倉について、これまでの研究がまず注目してきたのは、そのカリスマ性であつた。小仲信孝はその論の冒頭で、沼倉の異様な魅力が「そのいかがわしさは、たしかにただのものではなかつた」と表現し、貝島にとつて「沼倉ははじめて出会つた（恐るべき子ども）であつたに違いない」とその常人離れした恐ろしさを指摘している。また田中は「二人の（しやうきち）は、『平凡人』／『英傑』という明快な対比に置かれ」と捉える。<sup>18</sup>他の生徒の心理を完全に掌握するその力に「いかがわしさ」を見るにせよ「英傑」の素質を見るにせよ、ここで重視されているのは沼倉の比類なきカリスマ性である。実は沼倉のこのような特異性については、すでに作品発表当初から言及があつた。江口渙はこの作品について、「少年の一種特異な征服的人格を描いてそれが好く浮き出している。特異な性格の強さから放射する脅威に依つて、次第に周囲を征服し、遂に級中に自己の専制王国を建設するまでの過程がはつきりと示されてゐる」と、その主題を沼倉の「特異な征服的人格」とそれによる学級「征服」の「過程」に見ている。

たしかに沼倉には特別なカリスマ性が備わっているとみるべきだろう。また、それが学級の秩序を転覆する大きな原動力であつたことも間違いない。しかし、ここでさらに考えたいのは、沼倉のその非凡な力はどういうにして彼に備わつたのかということ、そして級中の生徒たちの異様とも思える沼倉への忠誠心を、沼倉の魔的な魅力からではなく彼ら自身の心性から説明できないかということである。次に見ていくように、この二つの疑問は一見無関係に見えて重要な点で関わり合っている。

実はテキストを仔細に読めば、異様な力を持つはずの沼倉のもう一つの側面が浮かび上がってくる。初めて沼倉を見た貝島は、彼を「成績のよくない、風儀の悪い子供だらうと、直覚的に」感じるが、実際には沼倉は「学力も劣等ではない」「性質も思ひの外温順で」「落ち着いた少年」であつた。「教場に居る時は別段普通の少年と変りがない」のであり、むしろ「読本を読ませて見ても、算術をやらせて見ても、常に相当の出来栄え」である。「東京の生徒に輪をかけて狡猾な、始末に負へない腕白なものも交つて」いるような学級の中で、沼倉が「教師を馬鹿にした

悪戯を煽動したり、級中の風儀を紊したりする」ことは決してない。また、貝島に学級を善導するよう促された場面でも、沼倉は「先生、分りました。きつと先生の仰つしやる通りにいたします」と、いかにも嬉しうに、得意の色を包みかねてニコニコしながら「答え、教師の信任を得たことに満足し得意になっている。これなどはむしろ素朴な学童らしい反応だと言ってよいだろう。

テキストにはこのように彼の素直で温順な性質が書き込まれていた。そして彼は学業においても優秀であった。沼倉は、学校空間において、あるいは教員にとつては理想的な優等生とも言うべき一面を持っていたのである。

もちろん先に見たとおり、沼倉が不気味なカリスマ性を有していることは否定できなない。しかし、そもそも語り手によって提示される沼倉のその異様さは、いくらか割り引いて理解しておく必要がある。というのも、語りの焦点人物である貝島は「土地の機業家でG銀行の重役をして居る鈴木某の息子」、「S水力電気株式会社社長の中村某の息子」、「K町の生薬屋の悴」、「T町に住んでゐる居る医者の息子」など、生徒の性質を常にその親の社会的身分と結びつけて考えるような価値観の持ち主だからである。沼倉に対しても貝島は「東京から流れ込んで来たらしい職工の悴」といった彼の親の職業や「卑しい顔立ちや垢じみた服装」といった外見を根柢に、「成績のよくない、風儀の悪い子供だらう」と判断する。彼のそのような偏見は、東京で「華族の邸や高位高官の住宅の多い山の手の一廓」に住み、自分の教える生徒たちが「大概中流以上」である一方で、我が家は逼迫し、子どもたちには「見すばらしい、哀れな姿」をさせざるをえなかった、親としての苦い経験から生じたものかもしれないが、何が原因であるにせよ、彼が沼倉から受ける印象には多分にバイアスがかかっていることには注意しておかなければならない。

### 何が沼倉を作ったか

さて、ではそのような沼倉の二面性をどのように理解すればよいだろうか。一人の少年の中に、素直な優等生としての一面と、教員をも飲み込む怪物的な威力とが同時に存在することをどのように説明すればよいのだろうか。

結論を先に述べれば、沼倉のこの二つの性質は決して互いに無関係ではない。

沼倉の温順で素直な性質と、「恐るべき子ども」としての性質、両者の関わりを考える際に重要な点が二つある。貝島が修身の授業を特別視していること、そして沼倉が「己は太閤秀吉になるんだ」と周囲に語っていることである。

前者の意味については、これまで多く議論されてきた。小仲は、「社会的な出世

の階段を登るだけが出世ではなく、それぞれの領域で「日本一になることも出世である」と考える当時の「高橋注、二邑」金次郎主義<sup>21</sup>は、「夢の実現を断念して非エリート<sup>22</sup>の道を歩まざるを得なかった貝島の心の支え」であったと論じる。また生方智子は、修身の時間が国家の求める価値観を生徒に内面化させるための装置であったことを踏まえて、貝島がそこで国家権力の体現者として主体化を試みていること、そして同時に、崩壊する家庭の中で失われつつある家長としての主体性を取り戻そうとしていることを論じた<sup>23</sup>。中谷元宣は、修身には「日本道徳の伝統である漢学精神があり」、したがって特に貝島にとつて修身の授業は、父が漢学者であったという自らの家系や学歴によって形成された個の本質までもが試される重要な場であったと指摘する<sup>24</sup>。さらに、このテキストを「聖職としての教師が職業としての教師に転換する物語」として読む日高は、修身という「生徒の人格指導といった、いわば『聖職』としての教師の立場が最も発揮される時間」を、沼倉が「革命」の時間にえらんだことに重要な意味を見る<sup>25</sup>。教室内の権力を貝島から奪うにはこれほどの好機はないからである。

これらはいずれも首肯できる読みである。貝島はたしかに、修身の授業に、そして二宮尊徳の逸話に自己のアイデンティティを賭けていただろう。しかし、修身との関わりという点では、もう一人重要な人物がいることを見逃してはならない。周囲に「己は太閤秀吉になるんだ」と言つて憚らない、もうひとりの「しやうきち」、沼倉吉吉である。

明治三五年、学校教科書をめぐる贈賄事件がおこり、これをきっかけに教科書の国定化が進む。第一期国定教科書は明治三七年から用いられ、その後、終戦まで国定教科書は五期に亘つて作成、使用された<sup>26</sup>。本作発表年の大正七年からは「第三期」が順に刊行されたが、谷崎が持つ国定教科書のイメージは、当時最新の「第三期」よりも、むしろ明治四三年から一〇年近く用いられた「第二期」に近かったことだろう。実際、大正七年時点でも「第二期」は現場で広く用いられていた<sup>26</sup>。その内容は、「第一期」に比べて「儒教主義の倫理がより強く示されると共に軍国的教材が登場、それらすべての道徳が家族主義と国家主義との結合を軸として再編<sup>27</sup>」されたという。帝国主義の段階に入ったこの時期の日本では、それを正当化する思想と倫理の浸透が、そしてまた忠君愛国の精神をもつ日本国民の養成が急務であった。修身、あるいは国語の第二期国定教科書は、それを実現する装置として編集されたのであった<sup>28</sup>。

さて、この「第二期」『尋常小学修身書』<sup>29</sup>は巻一から巻六によって成り、二宮金次郎の逸話は巻二の冒頭七課にわたって取り上げられている<sup>30</sup>。しかし実際にはこれ

は低学年用の内容で文章もごく平易であり、取り上げられているものも、作品の中で貝島が取り上げるような小田原藩家老服部家の家政再建の話ではなく、「オヤノオン」「カウカウ」「キンケン」など、幼少期「金次郎」の逸話ばかりである。貝島は修身教科書そのものを読み聞かせたのではなく、自ら好んで「尊徳」の服部家再建の逸話を講じたのだろう。

ところで、戦前の修身教科書には二宮尊徳に劣らず多く取り上げられた人物がいた。他ならぬ「太閤秀吉」である。第二期『修身書』巻四には「第五 志を立てよ」「第六 職務に勉勵せよ」「第七 皇室を尊べ」の三課に秀吉の逸話を取り上げられているが、それらを確認すると、そこでの秀吉のエピソードが、作品における沼倉の記述と重なることに気がつく。たとえば「尾張のまづしい農家の子で」「第五 志を立てよ」という貧しい出自と「小さい時からりつばな人にならうと志を立ててゐました」(同前)といった立身の志は、沼倉が「職工の悴」であること、また彼が「太閤秀吉になるんだ」と立身出世を志向していることと対応するし、家来に指示した城壁修繕がはかどらず、信長が秀吉にそれを命じたところ、翌日には完成させたという逸話(第六 職務に勉勵せよ)は、沼倉が、貝島から学級を主導することを依頼され、それを貝島の「予期以上に成功」させたことと重なる。

大正期の初等教育において、秀吉は二宮尊徳以上に子どもたちに影響を与えたことだろう。なぜなら、秀吉の逸話は、修身の教科書だけではなく、国語の教科書にも多く取り上げられたからである。次に「第二期」『尋常小学読本』を見てみよう。

『読本』は全一二巻から成る。秀吉の話は「第十四 豊臣秀吉 一」「第十五 豊臣秀吉 二」として巻六におさめられている。この巻は第三学年もしくは第四学年に用いられた教材だという。「第十四」が、その貧しい家の出身であることから書き起こされているのは修身教科書と同じだが、興味深いのは修身と異なり、「人がいくさのはなしをすると、耳をすまして聞いておました」と、秀吉の合戦への興味記述されていることである。その話題は続く「第十五」の伏線となり、次には秀吉の合戦巧者ぶりが記される。本稿にとって重要なのは、そこでの記述が、休み時間の沼倉の合戦ごっこの描写と重なることである。たとえば、「秀吉はいくさの上手な人で、たび／＼いくさをしたけれども、一ぺんもまけたことがありません。後には秀吉の馬じるしをみると、敵は戦はないでにげて行くやうになりました」という『読本』の記述と、「小さな王国」の「多勢の西村組は忽ちのうちに沼倉組の小勢の為に追ひ捲くられて、滅茶々に隊伍を掻き乱された揚句、右往左往に逃げ惑つて居る」、「一と度び沼倉が馬を進めて駆けて来るや否や、彼等は急に浮足立つて、ろく／＼戦ひもせず逃げてしまふ」という合戦ごっこの記述とを比較

してみれば、そのことは明らかだろう。

もう一つ、秀吉が天下を統べる過程と、沼倉が学級を支配する過程についても、両者の記述は類似している。『読本』には「秀吉のいきほひは、しぜん一日と盛になりました。信長のふるいけらしい勝家などはこれをきらつて、てきたひしましたが、かへつてほろぼされて、しまひには日本中の大名が皆秀吉の言ふことをきくやうになりました」とあり、一方、「小さな王国」では、「彼は勇氣と、寛大と、義侠心とに富んだ少年であつて、それが次第に彼をして級中の覇者たる位置に就かしたものがらしい。(中略)彼が入学した当座は、暫く西村との間に争覇戦が行はれたが、直ちに西村は降参しなければならなくなつた。(中略)現在誰一人も沼倉に拮抗しようとする者はない。みんな心から彼に悦服して居る」とある。両者ともに、次第に大きな覇権を握っていく様子や、敵対する同輩の存在とその討伐、そしてついに周囲をすべて服従させたことなどが順に書かれているのである。

このように、転校してきてからの沼倉の様子はあたかも修身や国語の教科書に伝説化された秀吉の様子をそのままなぞるかのよう描かれていた。『読本』に取り上げられた秀吉のエピソードがほんの教話であるにもかかわらず、これだけ記述が重なるということ、そしてなにより作中で沼倉自身が「己は太閤秀吉になるんだ」と言っていることを鑑みれば、これを偶然の一致とみるわけにはいかない。

この時期、秀吉は国家主義や立身出世主義を正当化するアイコンとして教育現場で用いられた。つまり、沼倉の秀吉への憧憬、そして同一化への欲求は、まさにそのような思想教育によつてこそ養われたものに他ならない。「勇氣と、寛大と、義侠心とに富んだ少年」、「正義を重んじ」、「任侠を尚ぶ」と繰り返して説明された沼倉の性質もまた『修身書』巻五の「第五課 仁と勇」「第六課 信義を重んぜよ」「第七課 誠実」といった各課で称揚されたものであった。そして、この三課もやはり、秀吉と加藤清正の逸話なのである。

先に確認した沼倉の一種純朴とも言える性質は、この文脈においてこそ理解できよう。沼倉は素直な優等生としての資質を備えていた。彼が同時代の思想教育をこれほどまでに内面化しているのは、その資質があつたからこそである。大正期の国家主義教育は、修身や国語の教科書を通じて、少年たちに国家が掲げる思想と倫理を注ぎ込んでいった。「温順」で「落ち着いた」優等生は、その思想と倫理とを、疑うこともなく吸収していったことだろう。かくして沼倉は、いわば大正前期の国家の理想を体現するような少年として育つていったのである。その存在は、教育にとつては成功の証となるはずだった。しかし、国家が求めたはずの思想と倫理を純粹に体現した沼倉はもはや、国家を象徴する学級、すなわち「小さな王国」に収ま

らない存在感を備えてしまったのである。「仁」と勇「信義」「誠実」、そして何より太閤秀吉のような「立身」への欲求。思想教育によって生み出された彼の威力は、結果的にそれを育てた教育そのものを内部から転覆させることとなったのである。

このような解釈に基づけば、先に立てたもう一つの問い、すなわち級中の生徒たちの異様なまでの沼倉への忠誠心についても、一貫した説明が与えられる。

さきに触れたように『修身書』巻五には、秀吉の忠臣である加藤清正に関する逸話が四課あり、中でも「第七課 誠実」は清正の主君に対する忠義を称えるエピソードになっている。一つは、石田三成らの讒言によって秀吉の怒りを買った蟄居を命じられていた清正が、伏見の大地震の際、秀吉の身を案じて真つ先に城に駆けつけ、部下とともに秀吉を守ったという逸話、もう一つは、秀吉亡き後、豊臣の恩を受けた者が家康の権勢になびいて次々と徳川につく中、清正だけは秀頼に仕えてよくその身を護ったという逸話である。

翻って貝島学級の生徒の描写はどうであったか。普段は腕白でいたずら小僧の西村は、沼倉が貝島に咎められると「主君の為に身命を投げ出した家来のやうな、犯し難い勇氣と覚悟」とを以て、沼倉を庇おうとする。西村だけではない。「全級の生徒が」「彼の命令を遵奉して、此の間のやうに沼倉の身に間違ひでもあれば、自ら進んで代りに体罰を受けようとする」。沼倉はこれら「家来」の忠誠心を試し、「忠義第一の者」に「殊勲を表彰」するのである。ここで、生徒たちの沼倉に対する忠義心が「主君」「身命」「家来」「殊勲」といった封建的な武士社会を暗示するレトリックで語られていることに注意したい。言うまでもなく、このことは右に見た『修身書』における清正の逸話との関連を示唆している。沼倉以外の生徒たちもまた沼倉と同じく、修身の逸話を通じて教えられた「忠義」の思想を内面化した存在として表象されているのである。

貝島学級の転覆は、一人の特異な怪物的少年によってだけ生じたわけではなかった。それが起きるためには沼倉の周りに、彼に忠義を誓い、彼のために犠牲になるうとする他の少年たちがいなければならなかった。「小さな王国」を崩壊させたのは、異様なカリスマ性を示す少年と、異様な忠誠心を持った少年たちである。その異様さはどちらも、大正期の日本が少年たちに施した思想教育に根ざしている。本作品に描かれた学級の崩壊は、いわば国家主義の自家中毒として読むことができるのである。

## おわりに

本稿では「小さな王国」を、国家主義教育が、その理想を体現するカリスマ的威力を持った一人の少年と、同じくその思想を内面化した多数の子どもたちによって、内部から崩壊させられる物語と読んだ。

この作品は「谷崎文学の中の孤島の趣を呈している」とか「他に系列を見出しにくい孤立した感じ」などと評されることがある。しかし、右のような解釈が「自らが生み出したものに、かえって自らが支配される」という構造に抽象化できるとすれば、そのような物語の構造はむしろ谷崎が好んで作品に結晶化したものであった。たとえば、「刺青」の主人公は自ら刺青を施した娘の美しさに飲み込まれ、娘の最初の「肥料」になってしまったし、「痴人の愛」の譲治は、理想的に育て上げたナオミの放縦ぶりに翻弄され、最後にはその魅力に拝跪してしまう。学校教育、女性崇拜とそのモチーフは大きく異なるが、いずれも谷崎の一貫した関心が形を変えて作品化されたものと見るべきであろう。

最後に、貝島家の逼迫した経済状況に触れておきたい。貝島が「沼倉共和国」に飲み込まれていく要因の一つには、貝島自身の困窮があったことを忘れてはいけないただろう。それはいかにも一個人の事情であり、本稿で論じた日本国家とその思想教育の問題とは隔たりがあるように見える。しかし日高が指摘したように、「いろいろの物価が高くなつた」ことを一因とする貝島の貧窮は、「第一次大戦下のインフレに伴う教員の生活難」であり、それは言うまでもなく、この時期の帝国主義や独占資本主義を背景として生じた社会問題だったのである。

先にタイトルについて考えたとき、本稿は「小さな王国」を貝島の支配する学級であると解釈した。しかしここまで論じてきたように、教室が修身や国語を通じてなされる思想教育の場であったことを踏まえれば、「小さな王国」は貝島学級の背後にあるさらに大きなものを暗示していたと見ることができよう。日露戦争以降、列強諸国に伍するため狭小な領土を拡大すべく帝国主義と国家主義に邁進する日本。「小さな王国」というタイトルはここにきて、教室を意味するメタファーから国家に対する痛烈な批判へと姿を変える。

附記 本稿は二〇一七年度同志社女子大学研究助成金（奨励研究）に基づく研究成果の一部である。

## 注

- 1 昭和二年三月、「改造」。
- 2 大正七年八月、「中外」。タイトルは当初「ちひさな王国」であったが、単行本『小さな王国』（大正八年六月、天佑社）に収められる際に「小さな王国」と改められた。本稿における引用は『谷崎潤一郎全集 第六卷』（平成二十七年二月、中央公論新社）に拠った。なお漢字は適宜新字に改め、ルビは省略した。
- 3 宗像和重「谷崎潤一郎『小さな王国』」（昭和六〇年一〇月、「国文学 解釈と教材の研究」）。
- 4 川端康成「作家と作品」（昭和九年六月、「中央公論」）。
- 5 宮城達郎「谷崎潤一郎『小さな王国』」（昭和四四年四月、「国文学」）。
- 6 前田愛「子どもたちの変容 ―近代文学史のなかで―」（昭和六〇年一〇月、「国文学 解釈と教材の研究」）。
- 7 谷崎は後に「幼少時代」（昭和三〇年四月〜昭和三一年三月）でこの作品に触れ、自らの同級生であった「のっさん」を引き合いに出しつつ「沼倉が級中の覇権を握って何十人かの同級生にスターリン的威力を振るつてゐた有様は、正しく『のっさん』そのまゝなのである」と、スターリンの名で共産主義とこの作品との関わりを示唆している。
- 8 注3に同じ。
- 9 注2で示したように、実際、単行本収録時には「ちひさな王国」から「小さな王国」と改められた。
- 10 吉野作造「我が国現代の社会問題」（大正七年一〇月、「中央公論」）。
- 11 日高佳紀「〈改造〉時代の学級王国 ―谷崎潤一郎『小さな王国』論―」（平成一〇年一〇月、「日本近代文学」）。
- 12 太白子「近刊の雑誌」（大正七年八月一日、「東京日日新聞」）。
- 13 「新教育」については『日本新教育百年史二』（小原国芳編、昭和四五年、玉川大学出版部）を参照した。
- 14 田中俊男「善人の側」と『悪人の側』 ―谷崎潤一郎『小さな王国』の時代―（平成一七年三月、「島大國文」）。
- 15 出木良輔「谷崎潤一郎『小さな王国』論 ―「新教育」をめぐる―」（平成二五年九月、「国文学攷」）。
- 16 注11に同じ。
- 17 注15に同じ。
- 18 小仲信孝「欲望する子どもたち ―『小さな王国』論」（平成八年二月、「跡見学園女子大学短期大学部紀要」）。これはおそらく、前田愛が注6に挙げた論考で「子供というものが、無垢な存在である一方で、時には大人以上に残酷であり、邪悪な存在であるというテーゼ」を読み、彼らをコクトーの小説のタイトルを借りて、恐るべき子どもたちと呼んだことを承けている。
- 19 注14に同じ。
- 20 「夕立を待つ心（四）」（大正七年八月七日、「時事新報」）。
- 21 注18に同じ。
- 22 生方智子「谷崎潤一郎『小さな王国』における共同体と権力」（平成二七年、「文芸研究 明治大学文学部紀要」）。
- 23 中谷元宣「『小さな王国』論 ―ある歴史家の挫折―」（平成一六年三月、「阪神近代文学研究」）。
- 24 注11に同じ。
- 25 以後、「第一期国定教科書」「第二期国定教科書」などを、「第一期」「第二期」などと略記する。
- 26 「所収教科書解題」「日本教科書大系 近代編 第七巻 国語（四）」（海後宗臣編、昭和三八年一二月、講談社）。
- 27 「修身教科書総解説」「日本教科書大系 近代編 第三巻 修身（三）」（海後宗臣編、昭和三七年一月、講談社）。
- 28 第二期国定教科書のうち、国語の教科書にあたる『尋常小学読本』の「編纂趣意書」には次のようにあり、国語であってもその内容は多分に修身的内容を含むものだったことがわかる。「海国思想ヲ養成シ、田園趣味ヲ涵養シ、又立憲自治ノ思想ヲ確固ニシテ、大国民ノ品格ヲ造成スルガ如キ材料ハ務メテ之ヲ採択シ、之ヲ一貫スルニ忠君愛國ノ精神ヲ以テシ、快闊、勤勉、忠誠能ク其ノ職務ニ尽スベキ国民ノ堅実ナル氣風ヲ養成セントスルハ、本書編纂ノ主眼トスル所ナリ」。
- 29 以後、『修身書』と略記する。
- 30 以後、教科書から引用は、修身の場合は『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身（三）』に、読本の場合は『日本教科書大系 近代編 第七巻 国語（四）』に拠った。
- 31 以後、『読本』と略記する。
- 32 唐澤富太郎『教科書の歴史 ―教科書と日本人の形成―』（昭和三一年一月、創文社）。

- 33 円地文子「解説」『日本の文学23 谷崎潤一郎』(谷崎潤一郎ほか編、昭和三九年、中央公論社)。
- 34 注11に同じ。